

調査彙報「＜ポピュリズム＞の分解（その1）」

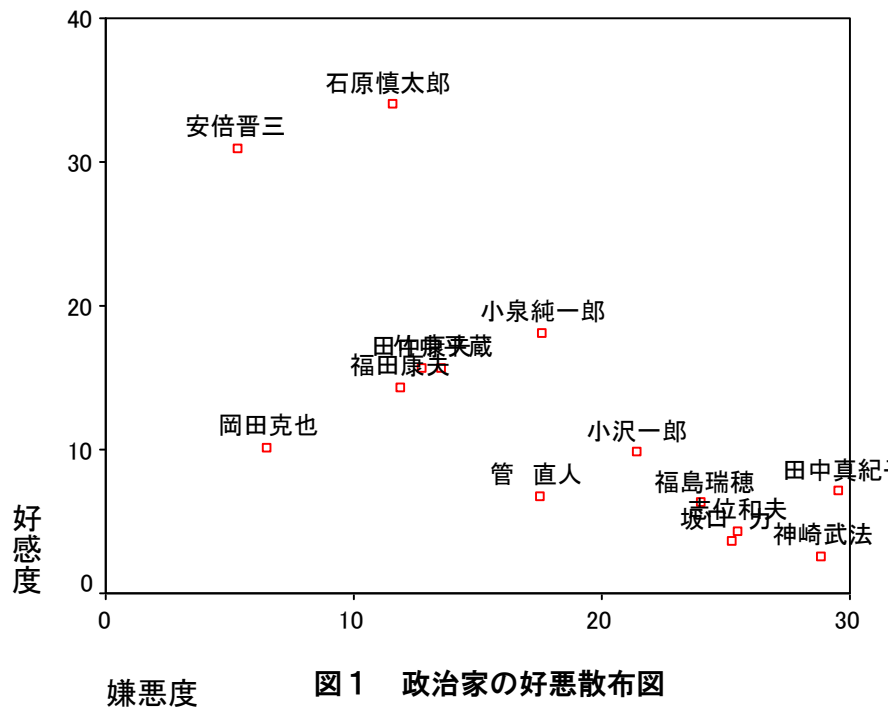
森 元 孝

2003年4月の東京都知事選挙において、石原慎太郎は300万という得票で2期目の当選を果たした。この得票数をどのように解釈すべきであろうか。「300万」は、石原慎太郎が1968年の参議院議員選挙全国区で立候補しトップ当選を果たしたときの数でもある。その後1975年に東京都知事選挙に立候補して敗れはしたが、233万票を獲得したことも思い起こすと、東京での石原慎太郎の立候補は、相当数の人気に支えられた「基礎票」のあることが考えられもする。さて、問題はこうした「人気」が何に支えられているのか、そしてそれは持続してきたのか、今回の300万票は新たな上澄みをどの程度持っているのか、これらについて詳細な分析をしていくことが、一連の本研究の目標である。

石原慎太郎支持は何に支えられているのか、そして石原慎太郎というパーソナリティが持つ「魅力」が、本来ひとまとまりにはならない塊を、ひとまとまりにしているとしたら、それにより何が隠されているのか、本稿は、主に1994年10月に実施したアンケート調査のデータをもとに分析を試みたものである。

1. 政治家イメージ変数の因子分析

次の図1は、2004年秋に考えることのできた主要な政治家たちについて4点尺度で好悪を聞いた結果の散布図である。この図は、現代日本のいわゆる人気ある政治家の特異な位置をよく表現している。「好き－嫌い」の軸で整理をすると、かなり極端な分布状況を見ることができるといふことである。ただちに、これにより政治が決まっているとは言えないが、それに影響を与える重要な要因であることは考えられる。



さて、ここで用いた4点尺度のデータの中について、2003年の東京都知事選挙において石原慎太郎候補に投票した対象者だけを抜き出して、これに対して主因子分析を施した結果が、次の表1である(ただし、上で使用した4点尺度のうち石原慎太郎についての項目は除去した)。

表1 政治家の好悪4点尺度の主因子解

	1	2	3
菅直人	0.674	-0.026	0.021
岡田克也	0.635	0.026	-0.049
福島瑞穂	0.580	-0.158	0.414
田中康夫	0.563	0.005	-0.040
志位和夫	0.548	-0.146	0.444
小沢一郎	0.498	-0.033	-0.151
田中真紀子	0.460	-0.151	0.096
小泉純一郎	-0.103	0.742	0.136
竹中平蔵	0.134	0.659	0.104
福田康夫	-0.063	0.552	0.205
安倍晋三	-0.165	0.509	-0.020
神崎武法	-0.095	0.418	0.633
坂口力	-0.041	0.347	0.643

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表1から明らかなように、3つの因子を確認することができる。調査を実施した当時、小泉内

閣において田中真紀子の外務大臣更迭後の状況を考えて、第1因子を「反自民・反小泉」、第2因子を「小泉自民党」、第3因子を「公明党」とでも呼ぶことが適当であろう。もう少し言うならば、この結果から、石原慎太郎候補に投票した人々の中にも、国政レベルでは、いくつかの特徴があり、それらを区別してみることができるということである。

さて、これら3つに区別される因子それぞれの関係を考えつつ、さらに3つの因子得点についてクラスター分析を施し、次節の説明を展開していくのに都合のよい場合を詳細に検討して、結果として次の5クラスターを抽出することとした。それぞれの度数分布は、次の表2のとおりである。

表2 石原投票者についての5クラスター

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
1	124	16.6	22.6	22.6
2	142	19.0	25.9	48.5
3	92	12.3	16.8	65.2
4	101	13.5	18.4	83.6
5	90	12.0	16.4	100.0
合計	549	73.3	100.0	—
欠損値	200	26.7	—	—
合計	749	100.0	—	—

Ward法 平方ユークリッド距離 標準化Z得点

2. 各クラスターの特徴

さて、得られた5つのクラスターについて、基本的属性について調べてみると、それぞれ次のような特徴を持っていた。

表3 5クラスターの基本的属性

		本人年齢	居住年数 (現住所)	居住年数 (東京都内)	年収
1	平均値	63.26	27.65	48.35	5.17
	度数	123	122	120	103
	標準偏差	12.044	18.326	17.335	2.582
2	平均値	63.56	29.64	50.97	4.98
	度数	142	142	140	125
	標準偏差	13.418	18.968	18.437	2.362
3	平均値	60.27	23.84	43.02	5.02
	度数	91	91	88	82
	標準偏差	13.143	16.453	18.305	2.454
4	平均値	59.65	24.67	44.73	4.62
	度数	100	100	98	91

	標準偏差	12.264	17.059	18.362	2.403
5	平均値	60.12	25.10	46.51	6.08
	度数	89	90	86	84
	標準偏差	11.403	19.065	17.398	2.888
全体	平均値	61.67	26.56	47.20	5.15
	度数	545	545	532	485
	標準偏差	12.616	18.170	18.150	2.562

前提にしている 2004 年のデータそのものが、高年齢男性に偏っているので、高年齢男性偏重のもとでの 5 種類のクラスターについての分析であることには間違いはないが、たんに高年齢男性ということだけでひとまとめにして終わらせることができないことがわかるということ、このクラスター分析を行う趣旨として理解をしてもらいたい。

さて、これら 5 クラスターは、とりわけ平均年齢に着目しつつ、その全体の平均をはさんで、最初の 1, 2 と、3, 4, 5 と、2 つのグループに分けて考えてみるができるように思う。このことは、次の表 4 にあるように、最初の 2 つのクラスターに年金生活者が多いことから、この区別が適切であると考えられるし、またとくに後者の 3, 4, 5 クラスター、とりわけ第 5 クラスターの有職率が高いことでも、この区別が妥当であると考えられる。

表4 5クラスターと職業

	仕事あり		パート・アルバイト		年金生活者		家事専念		その他の理由で無職		全体	
	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
1	42.90%	51	10.10%	12	37.00%	44	5.00%	6	5.00%	6	100.00%	119
2	44.30%	62	10.70%	15	37.90%	53	3.60%	5	3.60%	5	100.00%	140
3	50.60%	45	12.40%	11	24.70%	22	7.90%	7	4.50%	4	100.00%	89
4	47.50%	48	10.90%	11	29.70%	30	5.90%	6	5.90%	6	100.00%	101
5	66.70%	58	8.00%	7	20.70%	18	3.40%	3	1.10%	1	100.00%	87
全体	49.30%	264	10.40%	56	31.20%	167	5.00%	27	4.10%	22	100.00%	536

さらに特徴的であるのは、次の表5である。すなわち、後者3クラスターは、「大学・大学院卒」の割合において、格別に区別することができるそれであることがわかる。

表5 5クラスターと学歴

	中学		高校		専門学校		短期大学		大学・大学院		その他		全体	
	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
1	6.60%	8	26.20%	32	7.40%	9	4.10%	5	54.10%	65	1.60%	2	100.00%	122
2	7.10%	10	23.40%	33	8.50%	12	4.30%	6	53.10%	70	3.50%	5	100.00%	141
3	4.40%	4	25.60%	23	4.40%	4	4.40%	4	60.00%	52	1.10%	1	100.00%	90
4	9.00%	9	29.00%	29	9.00%	9	6.00%	6	47.00%	46	0.00%	0	100.00%	100
5	2.20%	2	21.30%	19	3.40%	3	1.10%	1	71.90%	57	0.00%	0	100.00%	89
全体	6.10%	33	25.10%	136	6.80%	37	4.10%	22	56.50%	290	1.50%	8	100.00%	542

とりわけ、第5クラスターの「大学・大学院卒」の割合はきわめて高く、表5ではわからないが、素データに遡及すると、大学院の割合が、7.9%と、たいへん高いのが特徴である。この値の高さは普通ではないとも言える。

表6 5クラスターと購読新聞

	朝日新聞		読売新聞		毎日新聞		日経新聞		産経新聞		東京新聞	
	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
1	31.70%	39	39.80%	49	4.90%	6	14.60%	18	3.30%	4	4.90%	6
2	17.00%	24	37.60%	53	5.70%	8	20.60%	29	9.90%	14	4.30%	6
3	32.60%	29	27.00%	24	6.70%	6	24.70%	22	3.40%	3	2.20%	2
4	47.00%	47	25.00%	25	7.00%	7	10.00%	10	4.00%	4	4.00%	4
5	17.80%	16	36.70%	33	4.40%	4	26.70%	24	12.20%	11	1.10%	1
全体	28.50%	155	33.90%	184	5.70%	31	19.00%	103	6.60%	36	3.50%	19

上の表6にあるように、購読新聞とクラスターの関係であるが、石原慎太郎投票者の特徴とし

て、『読売新聞』『産経新聞』の購読者の割合が高くなるのが一般的に確認できることである。そのことはそれで当然なことなのでもあるのだが、ここでの結果が、2003年の都知事選挙において、石原候補に投票した人に限定した上での分析結果であったことを思い起こしても、そうであるにもかかわらず、まだなお『朝日新聞』購読者が相当数いることもわかる。購読が、ただちにそれぞれの新聞の論調支持とイコールだということはまったく言えないということでもあるが、『朝日新聞』に着目すると、最初の2つのクラスター、そして後の3つのクラスターについて区別してみることに意味がありそうである。『読売新聞』『日本経済新聞』『産経新聞』の割合の相違も、これと関係させて考えていくことができるはずである。

購読新聞から政治傾向を推測してみるにはある範囲での意味があるようであるが、その他にもっと直接的に政治行動について聞いている項目を見てみることのほうが明確となろう。繰り返すが、本研究のデータは、2003年の都知事選挙において石原候補に投票した対象者に限定した分析であるが、それではその前回1999年の都知事選挙において、この対象者たちは、誰に投票したのであろうか。やはり石原候補に投票をしていたのであろうか。次の図2は、そのことを示したものである。

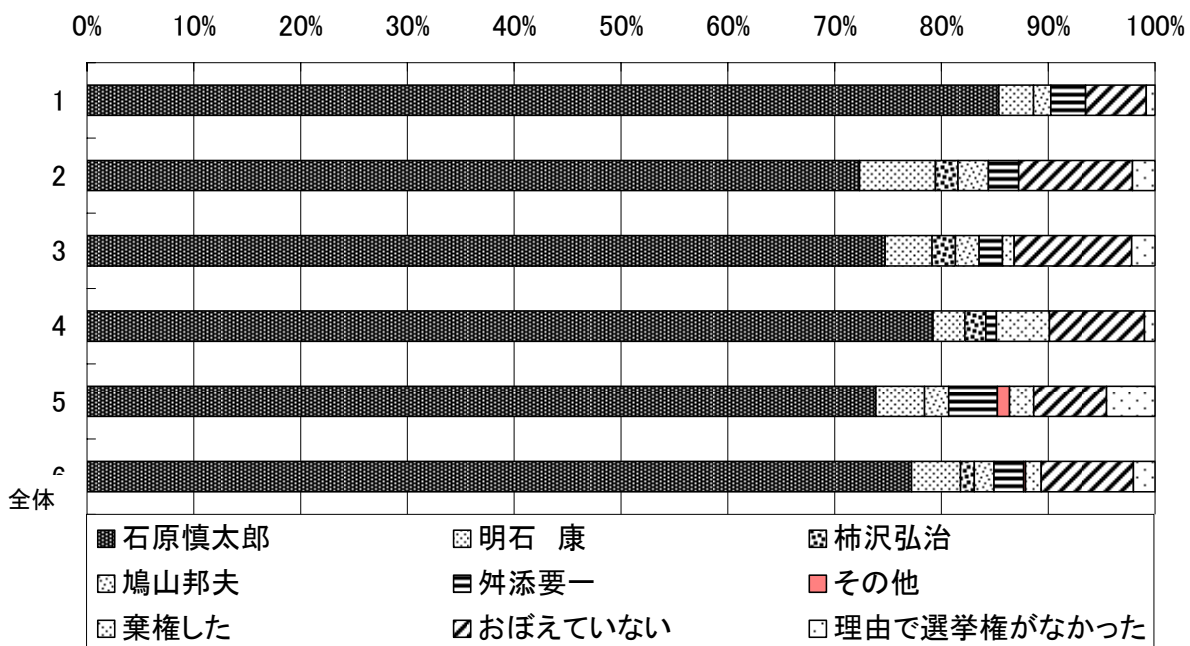


図2 1999年の東京都知事選挙における投票行動

クラスター1は、石原候補への支持力が最も強く、実に前回も85%が石原候補に投票をしている。どのクラスターについても、この時の選挙結果が、たしかに石原勝利であったものの、他の有力候補へ票が流れる割合がもう少し多くてもよいように思うが、全般に、すべてのクラスターについて、すなわちこのデータの対象者たちが、強く石原に好意を持つということが理解できる。

ただし、この石原への好意についても、ずっと変わらず投票した以来、好きであり続けているのかどうかというと少し違っているようにも見える。すなわち、次の図3にあるように、「知事

の仕事についての現在の満足度」を見てみると、とりわけ「満足」の割合に差が、あるクラスター4は、他に比べると控えめであることがわかる。

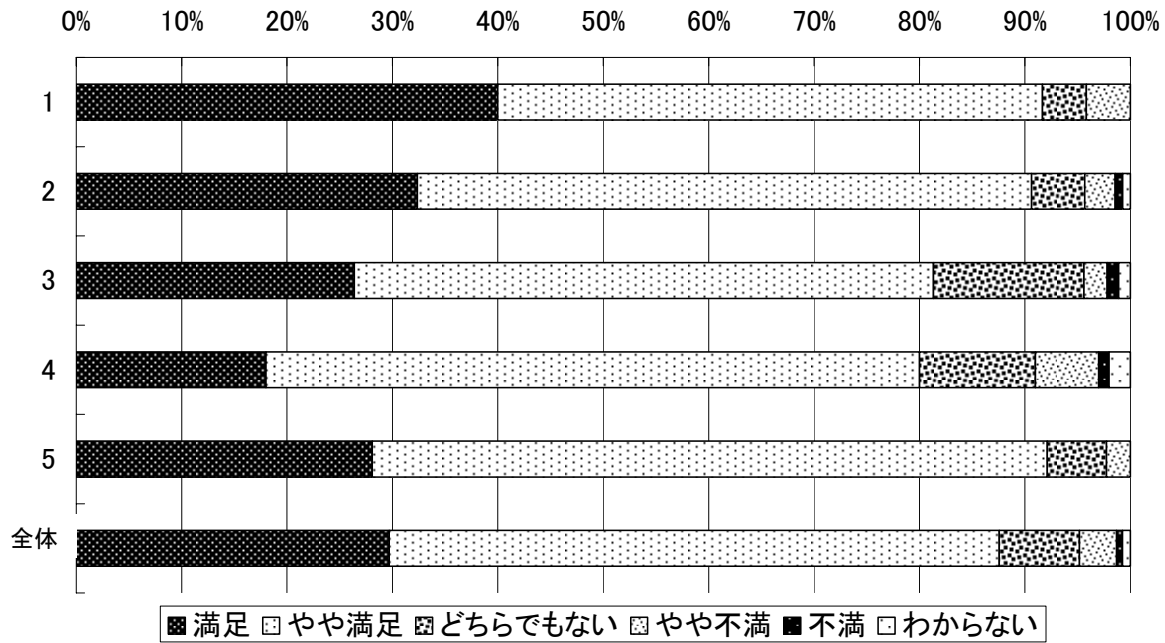


図3 都知事の現在の仕事についての満足度

この点は、次の図4にあるように2004年に行われた参議院議員選挙における投票行動結果を見てみると、さらにはっきりする。クラスター3と4は、この時の国政レベルでは、自由民主党支持ではなかったことがわかる。自由民主党支持と石原慎太郎支持とがイコールでないことはもちろんであるが、クラスター間で、国政での支持の違いに差があることについては注意しておく必要があるのかもしれない。

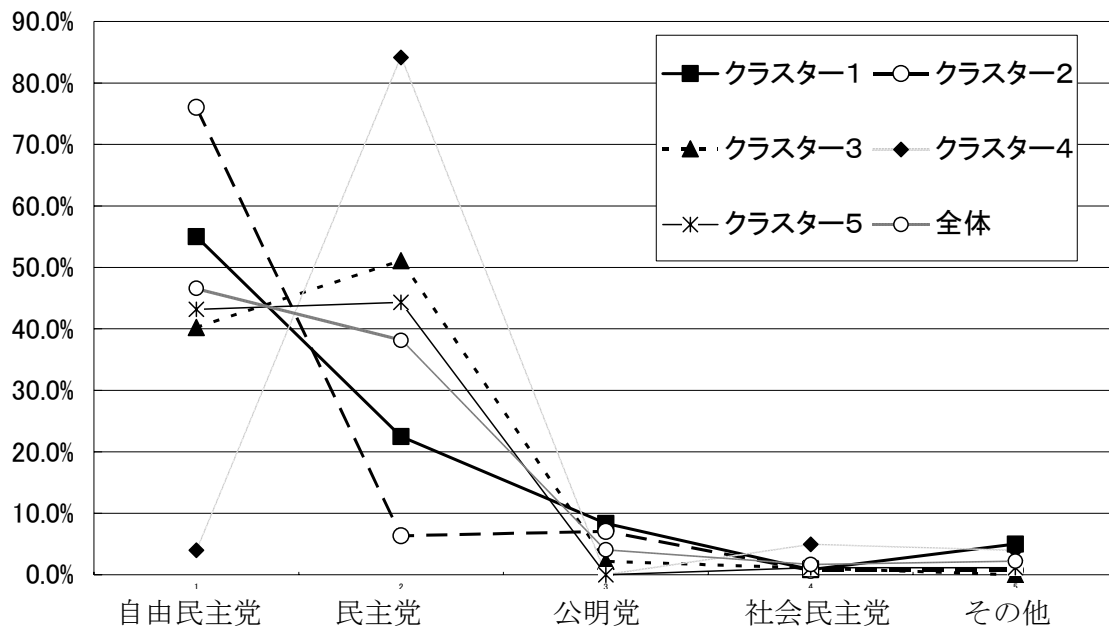


図 4

2004年の参議院議員選挙(東京比例区)における投票行動

本稿の関心にしたがって、もっと端的に石原慎太郎のイメージとの関係を見るために、関連する新聞記事を読んだ上で4点尺度に並んだ選択肢を選ばせるものである方法を試みた。

新聞記事の文章は、以下のとおりである。

①石原都知事「不法入国、たたき出す」——東京・池袋繁華街を視察

治安対策を公約に掲げる東京都の石原慎太郎知事と警察庁出身の竹花豊副知事が二十八日夜、JR池袋駅西口から北口にかけての繁華街を、初めて一緒に視察した。この地区は、風俗店や飲食店が集中しており、石原知事らは、警視庁の人見信男副総監らの説明を受けながら、約20分間にわたって歩いた。視察後、石原知事は「中国人向けの情報誌には、不法滞在者向けの広告も載っている。東京からは不法入国の外国人はたたき出す」と語気を強めた。(2003年7月29日『毎日新聞』より)

②「生活基盤、日本に」——イラン人一家の国外退去取り消し

不法滞在の外国人に特例で滞在を認める「在留特別許可」を求めたが認められず、逆に国外退去(退去強制)処分を受けた群馬県のイラン人一家四人が、処分の取り消しを東京入国管理局に求めた訴訟の判決が十九日、東京地裁であった。藤山雅行裁判長は、「一家は十年にわたり善良な市民として生活の基盤を築いている。帰国した場合の不利益を考えると処分は裁量権の逸脱または乱用にあたる」と述べ、四人の退去処分を取り消した。

①の記事「不法入国たたき出す」発言は、石原都知事第1期の任期中に出た発言であり、この時の新聞報道は、警察庁から肝いりで入れた治安回復担当の副知事との池袋視察後のそれであった。その内容にある「ある種の乱暴さ」もたしかに問題が少なくないが、一種の「活劇」風の石原慎太郎が浮かび上がってくるということで、その発言の乱暴さよりも、一種の小気味よさに、かえって好印象が得られたようにも解釈してみることができやもしれない。むしろ、そうした

解釈ができるリソースには、大いに問題があるとも言えるのであるが。結果を整理した図5から、クラスター4が他の項目との関係でわかる特徴を示している。

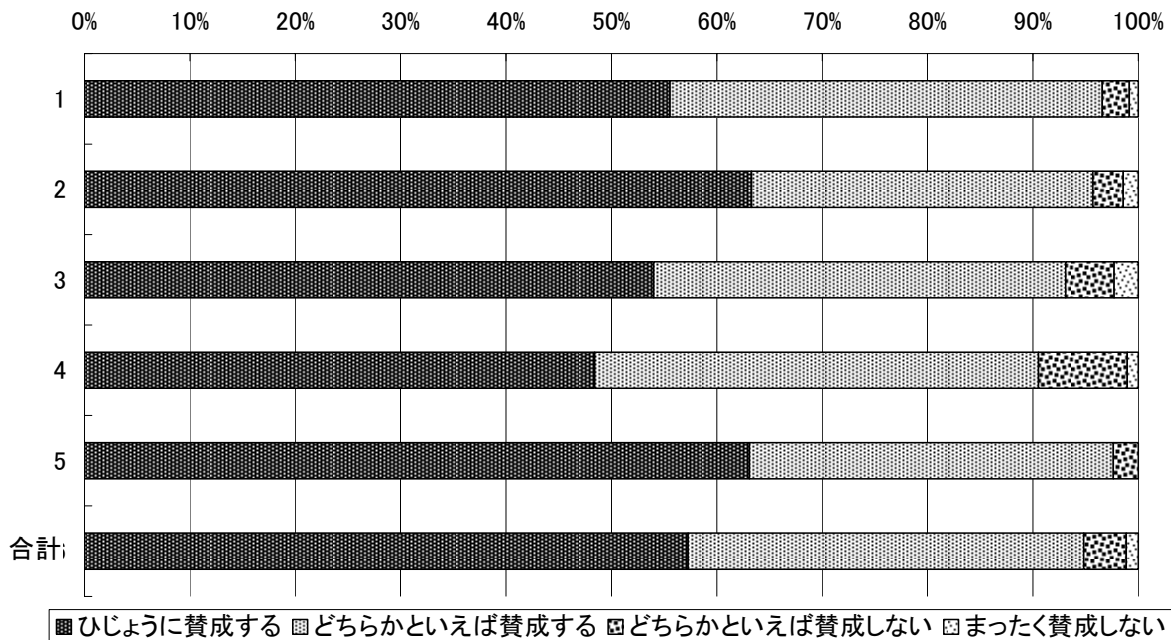


図5 「不法入国たたき出す」発言への賛否

というのも、このことは、②の記事にあるように、人道主義という普遍主義の内容の場合と比べてみる必要がある。この種の普遍主義的な内容になると、当然のことであろうが図6のように、クラスター間の差はそれほど大きくないことがわかる。

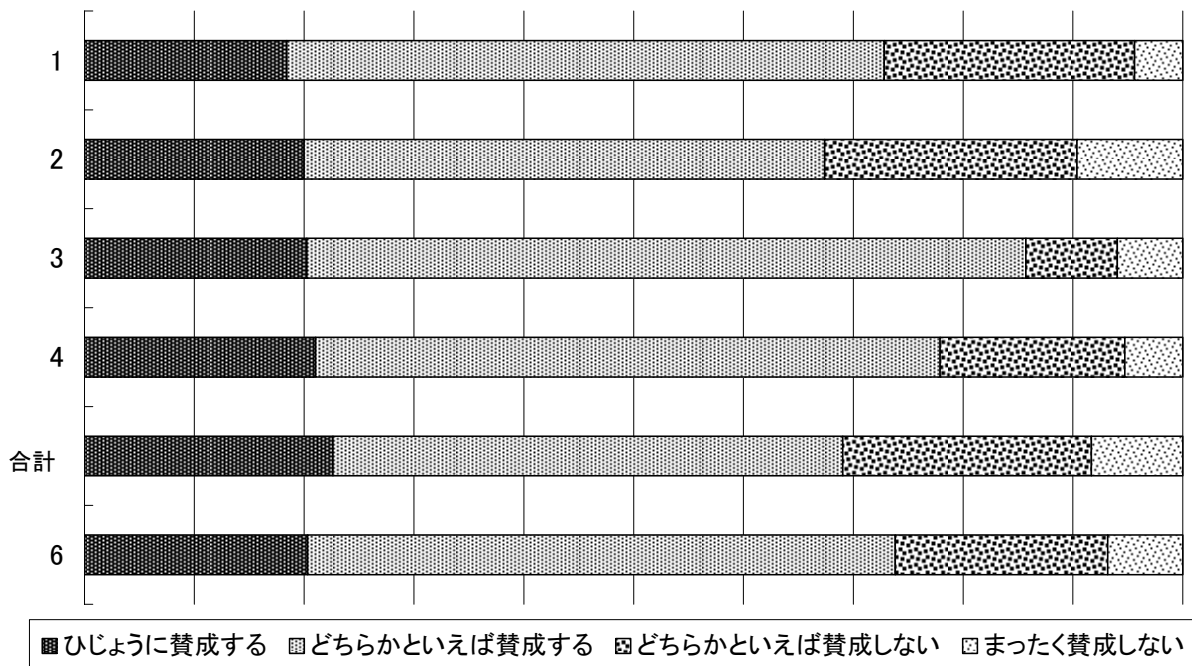


図6 「イラン人家族国外退去取り消し決定」についての賛否

最後に、各種社会活動への参加について、クラスター別の比較を試みたものを示しておく。

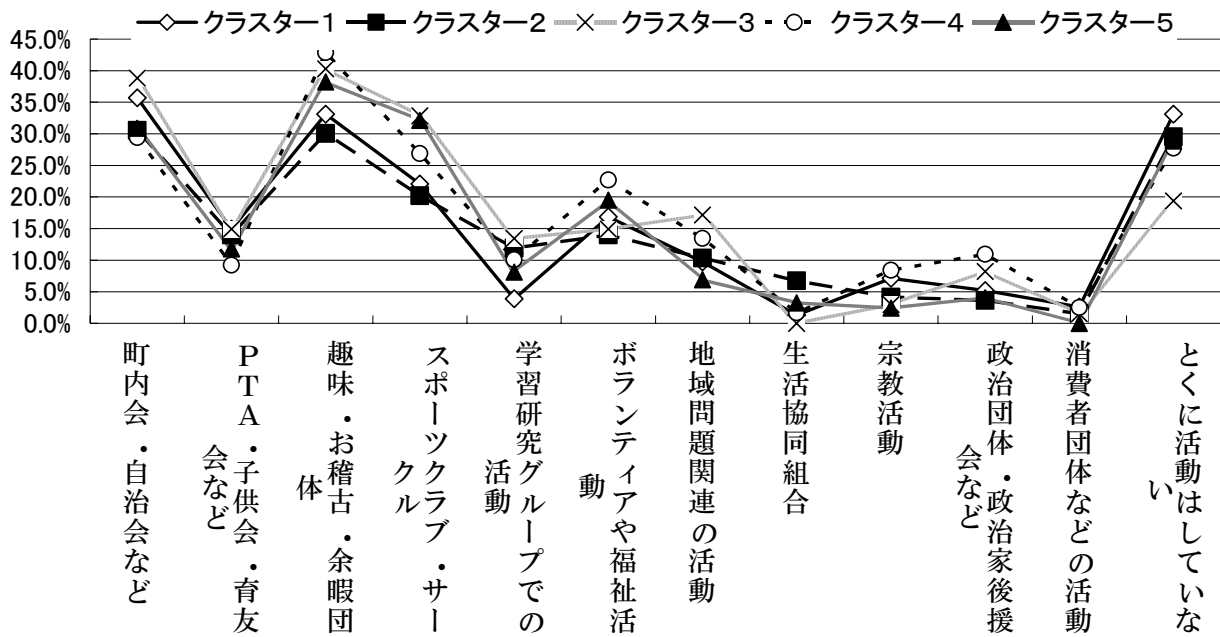


図7 社会諸活動とクラスター

補足. クラスタと地区の関係

2004年に実施したアンケート調査の調査票は、調査票の色により区・市のレベルとともに、さらに各区・市内の3地区の区別をすることができるように設定したものである（もちろん郵送法によるものであり、対象者には遡及することはできない）。回収率と居住年数とから、概ね次のような散布図による地区区分を想定することができる。

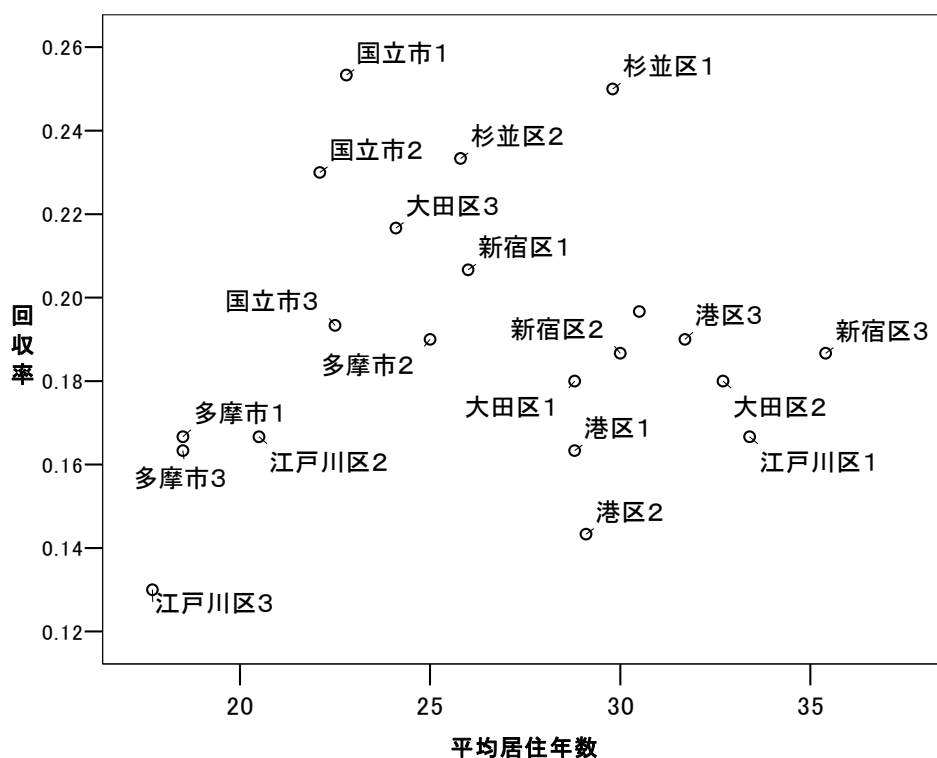


図8 対象地区の回収率と居住年数による散布図

さて、こうした点での地域イメージを抱いて、各地区とクラスターとの関係を考えてみる。ただし、これはあくまでもイメージであり、クラスターで抽出される特徴例を、別途、面接調査などで補足していく必要がある。地域そのものを、単純に分類する関心はここにはない。次の表7は、各地区のクラスターの分布割合を示したものであり、全体の分布割合の多い順にソートしたものである。全体の平均値が、4.76%となる（表中にある横太線でその高低を区分して表示）。

表7 地区別クラスター分布割合（全体の割合順）

	1	2	3	4	5	全体
国立市1	7.0%	8.6%	5.0%	6.4%	5.7%	6.6%
国立市2	3.2%	8.6%	7.9%	7.2%	5.7%	6.5%
杉並区2	8.3%	2.0%	8.6%	5.6%	6.1%	5.9%
杉並区1	3.8%	5.6%	2.9%	8.0%	6.5%	5.4%
杉並区3	5.7%	6.6%	5.0%	5.6%	4.6%	5.4%
国立市3	4.5%	7.1%	2.2%	5.6%	5.7%	5.2%
大田区3	7.0%	4.5%	5.0%	4.0%	5.0%	5.1%
多摩市2	3.8%	5.6%	8.6%	4.0%	4.2%	5.1%
港区3	3.8%	6.1%	4.3%	5.6%	5.0%	5.0%
新宿区1	3.2%	7.1%	2.9%	3.2%	5.7%	4.8%
多摩市3	3.2%	7.1%	5.8%	2.4%	4.6%	4.8%
新宿区3	5.7%	6.6%	2.9%	2.4%	4.6%	4.7%
新宿区2	3.8%	4.5%	3.6%	7.2%	4.2%	4.5%
江戸川区2	4.5%	2.0%	4.3%	6.4%	4.6%	4.2%
港区2	5.1%	1.0%	4.3%	6.4%	4.6%	4.1%
江戸川区1	7.6%	3.0%	2.2%	5.6%	3.1%	4.1%
大田区1	4.5%	2.5%	7.2%	3.2%	3.8%	4.1%
多摩市1	3.8%	2.5%	5.0%	3.2%	5.0%	4.0%
大田区2	1.9%	3.5%	5.0%	2.4%	5.3%	3.9%
江戸川区3	5.1%	4.5%	2.9%	1.6%	2.7%	3.4%
港区1	4.5%	1.0%	4.3%	4.0%	3.4%	3.3%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

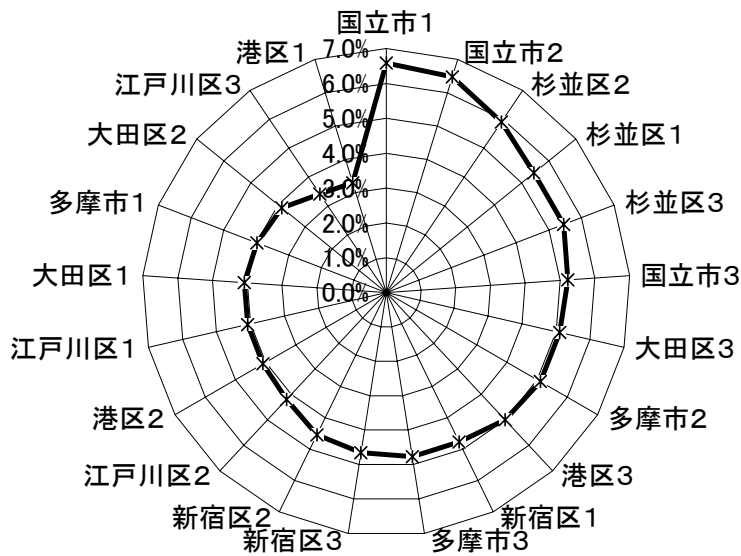
途中の整理を省略するが、各クラスターの地区別分布割合をソートして大きい順に並べていくと、各クラスターについて、それぞれ地区別割合順序を見ることができる（表7b）。

表7b クラスター別地区割合順位

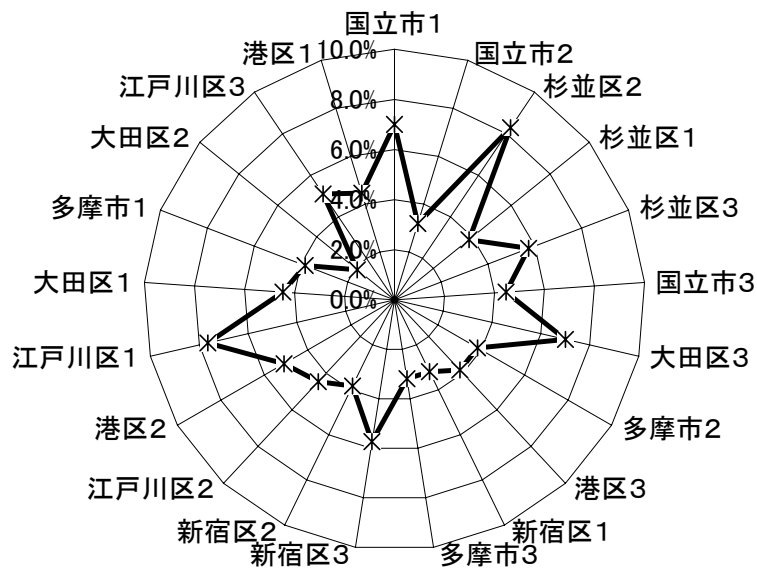
1	2	3	4	5
杉並区2	国立市1	杉並区2	杉並区1	杉並区1
江戸川区1	国立市2	多摩市2	国立市2	杉並区2
国立市1	国立市3	国立市2	新宿区2	国立市2
大田区3	新宿区1	大田区1	国立市1	国立市1
杉並区3	多摩市3	多摩市3	江戸川区2	国立市3
新宿区3	杉並区3	国立市1	港区2	新宿区1
港区2	新宿区3	杉並区3	杉並区2	大田区2
江戸川区3	港区3	大田区3	杉並区3	港区3
国立市3	杉並区1	多摩市1	港区3	大田区3
江戸川区2	多摩市2	大田区2	国立市3	多摩市1
大田区1	大田区3	港区3	江戸川区1	江戸川区2
港区1	新宿区2	江戸川区2	多摩市2	港区2
杉並区1	江戸川区3	港区2	大田区3	杉並区3
多摩市2	大田区2	港区1	港区1	多摩市3
港区3	江戸川区1	新宿区2	大田区1	新宿区3
新宿区2	大田区1	杉並区1	多摩市1	新宿区2
多摩市1	多摩市1	新宿区1	新宿区1	多摩市2
国立市2	杉並区2	新宿区3	多摩市3	大田区1
新宿区1	江戸川区2	江戸川区3	大田区2	港区1
多摩市3	港区2	国立市3	新宿区3	江戸川区1
大田区2	港区1	江戸川区1	江戸川区3	江戸川区3

以下は、これらをレーダー・チャートにより整理し直したものである。

クラスター全体

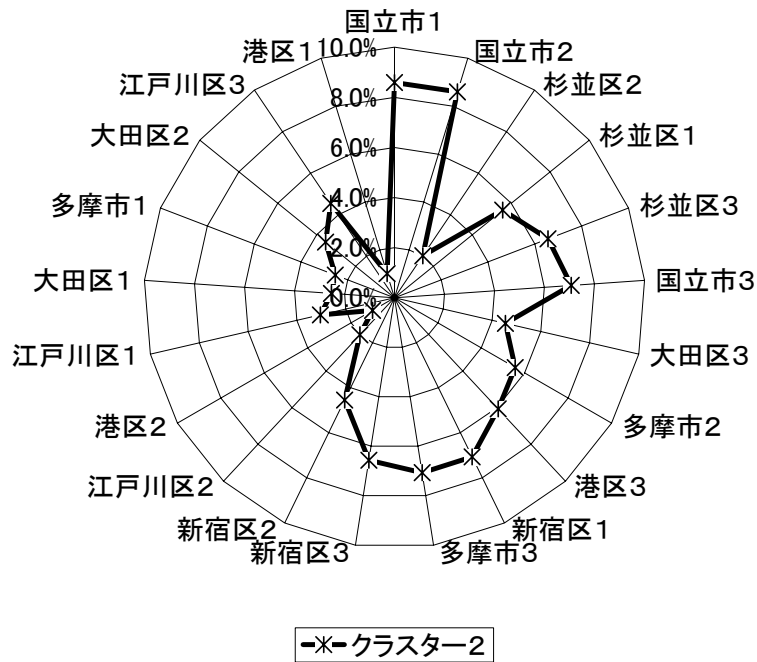


クラスター1

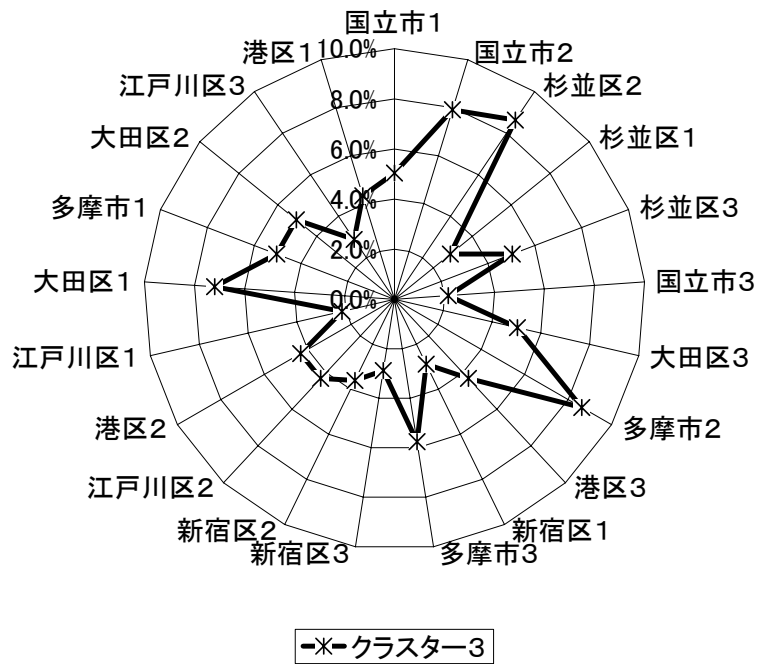


-*-クラスター1

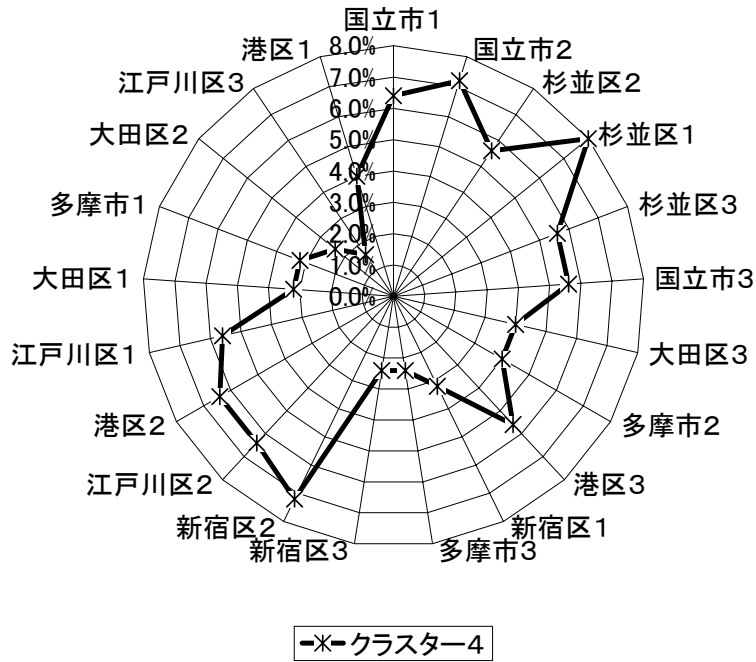
クラスター2



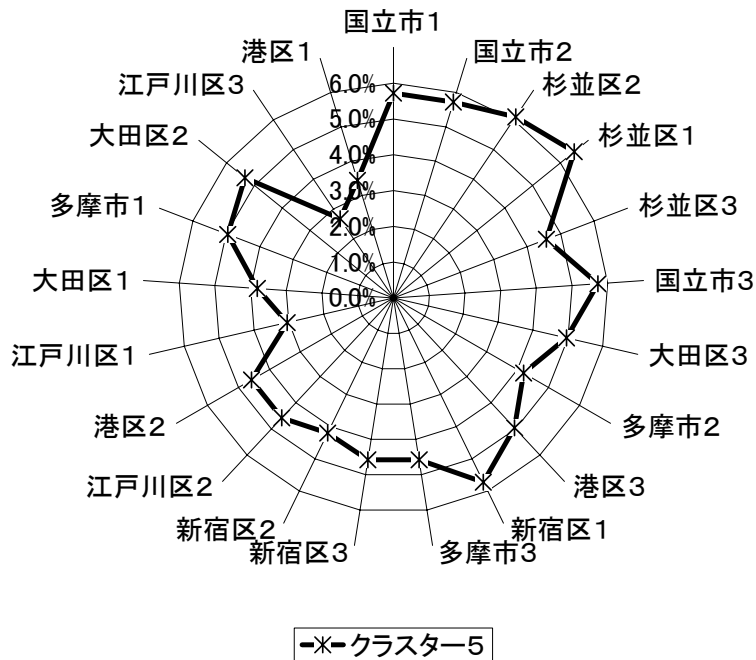
クラスター3



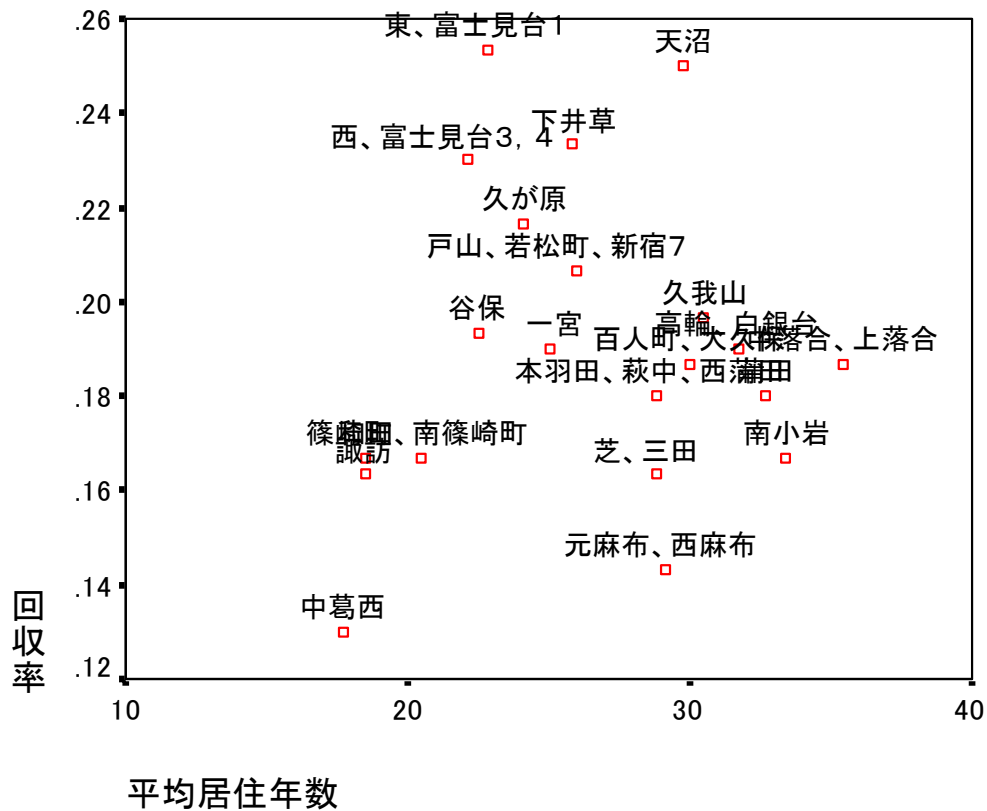
クラスター4



クラスター5



各地区の元データ名を表示すると次のようになる。



森 元孝
早稲田大学文学学術院・文化構想学部教授
wienmoto@waseda.jp